

鹿児島県内の公立中学校・高等学校における AET（外国人英語指導助手）の実態 ——アンケート結果とその分析——

山 本 秀 行

I. はじめに

1. アンケートの目的および意義

昭和62（1987）年度、文部省の「語学指導等を行う外国青年招致事業」（Japan Exchange and Teaching [JET] Program）のもとに AET（外国人英語指導助手）の招致が開始されて以来、本年度平成 4（1992）年度をもって、ちょうど 5 年目という節目を迎えるに至った。

鹿児島県においては、それと時を同じくして、昭和62（1987）年度に AET の招致が開始され、これまで数多くの AET が県内各公立中学校・高等学校の教壇に立ち、本県の英語教育の発展に寄与してきた。鹿児島県は九州各県に先駆けて JET Program の前身とも言える二つの外国人助手招致事業、昭和44（1969）年～51（1976）年の在日合衆国教育委員会（フルブライト委員会）と文部省の協力によるフルブライト助手、昭和52（1977）年～61（1986）年の文部省による英語指導主事助手（Mombusho English Fellows [MEF]）のそれぞれに一貫して参加し続けた。この点で鹿児島県は外国人助手受け入れにおける先進県の一つであるという評価を下してもよいだろう。

平成元（1989）年に公示され、数年後〔中学校は平成 5（1993）年、高等学校は平成 6（1994）年〕に実施をひかえている新学習指導要領では「コミュニケーション能力の育成」が外国語科の教科目標として大きくうたわれ、日本の英語教育は従来の読み書くこと中心の異文化受容のための教育から聞き話すこと中心のコミュニケーションのための教育への転換を迫られている。

また、「国際化の時代」と言われて久しい今日、我々の置かれた状況を鑑みれば、国際語である英語が世界を結ぶコミュニケーションの手段として一層重要なものとなってゆくことは間違いないだろう。このような英語教育を取り巻く状況を考え合わせれば、これから AET が果すべき役割がますます大きくなってゆくことは明白である。

そのような時代の要請にこたえるべく、JET Program 開始から 5 年目の節目にあたる今年度こそ、鹿児島県内の公立中学校・高等学校における AET の実態をアンケート調査し、その実態を的確に把握することが必要である。すなわち、このような現状の再認識こそ、今後の JET Program のより一層の発展には必要不可欠だからである。

これまで AET に関する様々な実態調査・研究が研究雑誌，学会誌，研究機関の紀要等に数多く発表されている。しかしながら，その多くは全国の中学校・高等学校を対象にした網羅的な調査であったり，あるいはまた，ある学校・学級のみを対象にした限定的な調査であったりで，我々が行ったような，ある特定の県の公立中学校・高等学校を対象を限定した調査はあまり例がない。また，鹿児島県に限ってみれば，このようなアンケート調査が行われるのはおそらくこれが初めてで，その意味においてもこの調査の意義は決して小さくないように思われる。

2. アンケートの方法

実態をよりの確かつ効率的に把握するため，原則として無作為抽出・無記名・筆記式アンケートとした。回答を依頼したのは鹿児島県内の公立中学校・高等学校の英語科主任または AET 係英語科教諭であるが，ただしそれらに該当する方がいない場合，任意の英語科教諭でも可とした。

調査対象は県内の全公立高等学校（ただし，定時制・通信制課程及び分校は除く）81校と全公立中学校274校のうち無作為抽出によって選び出した119校の計200校とした。¹⁾

また，アンケートは依頼文とともに，平成4（1992）年9月下旬，各校に送付され，締切日を同年10月17日とし，郵送によって回収した。

1) 無作為抽出に際しては，教育心理統計法に詳しい本学助教授広瀬春次氏のご助言およびご指導のもとに，住田幸次郎著『初歩の教育心理統計法』（京都，ナカニシヤ出版，1988年）の無作為抽出法および乱数表を用いて厳正かつ慎重に行った。

II. 鹿児島県内の公立中学校・高等学校における AET（外国人英語指導助手） の実態に関するアンケート調査結果²⁾

各質問を読み、該当する選択肢の記号を一つ（複数回答可と記してあるものはいくつでも可）、丸で囲んでください。ただし、選択肢がない質問に関しては、あなたの意見を自由にお書きください。

[総数200（中学校119，高等学校81）のうち回答数154（中学校85，高等学校69），回答率77%] <%の場合，小数点以下四捨五入>

1. あなたの勤務校についておたずねします。

- (1)学校区分：ア. 中学校 イ. 高等学校（普通系）
 ウ. 高等学校（普通系以外）

ア	85 (55%)	イ	51 (33%)	ウ	18 (12%)
---	----------	---	----------	---	----------

- (2)規模： ア. 1学年5学級未満 イ. 1学年5学級以上10学級未満
 ウ. 1学年10学級以上 エ. その他（ ）

ア	91 (59%)	イ	48 (31%)	ウ	11 (7%)	エ	4 (3%)
---	----------	---	----------	---	---------	---	--------

2) 太線枠内に囲まれているのが、調査に使用されたアンケート用紙に記載されていたままの設問等であり、それぞれの設問の直後にあるのが、その結果である。結果の欄に記されている数字は各選択肢に対する回答数を示し、その後の（ ）内には全回答数154における割合を小数点以下四捨五入により整数化した数値を記した。また本論中、一部を除き、外国人英語指導助手（Assistant English Teacher）を AET，日本人英語教師（Japanese Teacher of English）を JTE，協同授業（Team Teaching）を TT と略記した。なお、このアンケート作成にあたっては本学地域研究所「鹿児島の英語教育」プロジェクト責任者門田明教授，ならびに本学卒業の英語教員有志からなる本学英語教育懇談会のメンバーの方々からご助言とご指導を，その実施にあたっては鹿児島県教育委員会とりわけ学校教育課指導主事の今徳氏，ならびに本学地域研究所とりわけ同研究所所長の小住フミ子教授からご理解とご支援をいただいた。これらの方々をはじめお世話になったの方々に対して謝意を表したい。

[エ. その他の回答例] ³⁾

* 1年10学級, 2年9学級, 3年10学級 (都・中)

* 1学年5人・2人・2人 (離・中)

* 2年複式学級, 3年単式学級 (離・中)

(3)所在地: **ア**. 都市部 (鹿児島市・鹿屋市など住所に～市がつくもの。ただし, 離島は除く。)

イ. 郡部 (始良郡, 日置郡など住所に～郡がつくもの。ただし, 離島は除く。)

ウ. 離島部 (奄美大島, 種子島, 屋久島など)

ア	54 (35%)	イ	60 (39%)	ウ	40 (26%)
----------	----------	----------	----------	----------	----------

2. あなたの勤務校への AET 訪問形態についておたずねします

ア. 常駐 (毎日学校にいる) **イ**. 準常駐 (週の半分以上学校にいる)

ウ. 定期的訪問 (決まった日・曜日に学校に来る)

エ. 不定期的訪問 (学校に来る日・曜日が決まっていない) **オ**. 訪問なし

ア	1 (1%)	イ	11 (7%)	ウ	85 (55%)	エ	56 (36%)	オ	1 (1%)
----------	--------	----------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	--------

※ 2の質問で, **ウ**「定期的訪問」と答えた方のみお答え下さい。

AET 訪問回数は: **ア**. 月1回程度 **イ**. 月2回程度 **ウ**. 週1回程度

エ. 週2回以上 **オ**. その他 ()

ア	15 (10%)	イ	26 (17%)	ウ	17 (11%)	エ	13 (8%)	オ	11 (7%)
----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	----------	---------

3) 回答した学校の所在地および種別を () 内に記す。都=都市部, 郡=郡部, 離=離島部, 中=中学校, 普高=普通系高等学校, 普外高=普通系以外の高等学校。丸付き数字は同様の回答の総数を示す。なお, 表現および表記は回答の趣旨を変えないように留意して改めたところがある。

[オ. その他の回答例]

*教育事務所より期日が指定される (離・普高)

*学期2回程度 (郡・中, 離・中)

3. あなたの勤務校へ訪問している (あるいは常駐している) AET は:

ア. 特定の一人 イ. 特定の複数人 ウ. 不特定 エ. その他 ()

ア	147 (95%)	イ	5 (3%)	ウ	2 (1%)	エ	0 (0%)
---	-----------	---	--------	---	--------	---	--------

4. あなたの AET との Team Teaching の経験および頻度についておたずねします

(1)今までに AET との Team Teaching をした経験が:

ア. ある イ. ない

ア	150 (97%)	イ	4 (3%)
---	-----------	---	--------

※(1)で, ア「ある」と答えた方のみお答えください

(2) (i)Team Teaching をやることに対しては:

ア. 積極的である イ. あまり積極的ではない ウ. どちらともいえない
エ. その他 ()

ア	65 (42%)	イ	40 (26%)	ウ	42 (27%)	エ	0 (0%)
---	----------	---	----------	---	----------	---	--------

(ii)過去1年間に AET との Team Teaching を

ア. 定期的に行っている イ. 不定期的に行っている

ア	90 (58%)	イ	56 (36%)
---	----------	---	----------

※(2)(ii)で、ア「定期的に行っている」と答えた方のみお答えください

(3) (i)Team Teaching の回数は年間平均して：

ア. 週3回以上 イ. 週2回 ウ. 週1回
 エ. 月2回程度 (隔週1回) オ. 月1回程度
 カ. その他 ()

ア	4 (3%)	イ	9 (6%)	ウ	16 (10%)	エ	24 (16%)	オ	36 (23%)
カ	10 (6%)								

[カ. その他の回答例]

*月3回程度 (郡・普高) *学期1～2回 (郡・普外高)

(ii)現在の Team Teaching の回数は：

ア. 少なすぎる イ. ちょうどよい ウ. 多すぎる

ア	11 (7%)	イ	81 (53%)	ウ	7 (5%)
---	---------	---	----------	---	--------

※(1)で、イ「ない」と答えた方のみお答えください

(4)AET との Team Teaching を希望しますか

ア. 是非とも希望する イ. できれば希望する ウ. どちらでもよい
 エ. 希望しない オ. その他 ()

ア	4 (3%)	イ	6 (4%)	ウ	13 (8%)	エ	4 (3%)	オ	1 (1%)
---	--------	---	--------	---	---------	---	--------	---	--------

ツ. スキット上演指導 テ. 生徒のしつけ ト. ペーパーテストの作成
 ナ. ペーパーテストの実施 ニ. ペーパーテストの採点および評価
 ヌ. インフォーマントとして ネ. 英文法の指導 ノ. ヒアリングテスト
 ハ. 受験勉強対策 ヒ. その他 ()

ア	140 (91%)	イ	137 (89%)	ウ	122 (79%)	エ	63 (41%)	オ	59 (38%)
カ	117 (76%)	キ	38 (25%)	ク	項目なし ⁴⁾	ケ	39 (25%)	コ	110 (71%)
サ	33 (21%)	シ	38 (25%)	ス	51 (33%)	セ	18 (12%)	ソ	9 (6%)
タ	21 (14%)	チ	0 (0%)	ツ	18 (12%)	テ	2 (1%)	ト	3 (2%)
ナ	3 (2%)	ニ	2 (1%)	ヌ	30 (19%)	ネ	3 (2%)	ノ	43 (28%)
ハ	1 (1%)	ヒ	1 (1%)						

[ヒ. その他の回答例]

* AET の本国の紹介——特別授業 (郡・中)

(5)AET と Team Teaching の時, 多くの場合, 生徒の反応は :

- ア. ほとんど全部の生徒が授業内容を理解し, 積極的に授業に参加しているようだ
- イ. 授業内容を理解し, 積極的に授業に参加している生徒とそうではない生徒が, ほぼ半々ぐらいの割合でいるようだ
- ウ. ほとんど全部の生徒が授業内容を理解できず, あまり積極的に授業に参加していないようだ
- エ. 時と場合によるのでどれともいえない
- オ. その他 ()

ア	34 (22%)	イ	63 (41%)	ウ	16 (10%)	エ	31 (20%)	オ	6 (4%)
---	----------	---	----------	---	----------	---	----------	---	--------

4) 著者のミスによりクは設問をしていなかった。

ア	104 (68%)	イ	29 (19%)	ウ	68 (44%)	エ	16 (10%)	オ	65 (42%)
カ	76 (49%)	キ	20 (13%)	ク	59 (38%)	ケ	11 (7%)	コ	11 (7%)

[コ. その他の回答例]

- *明るさと日本人に対する親しさ (都・普高) *ユーモア (都・普外高)
- *積極性 (都・普外高, 離・中) *人柄 (離・普高)
- *教材作りの工夫 (郡・普外高) *文法を説明する技術 (郡・中)

(iii)JTE にとって必要なものは (複数回答可) :

ア. AET と対等に話せる英会話力 イ. やる気・熱意

ウ. Team Teaching に関するマニュアル エ. Team Teaching の過去の経験

オ. Team Teaching の理論・技術についての研修

カ. Team Teaching 専門の指導者

キ. 従来の英語の時間以外に Team Teaching のための時間を設定する

ク. 定期試験に英語を聞き話す力を試す問題を導入する

ケ. その他 ()

ア	121 (79%)	イ	80 (52%)	ウ	55 (36%)	エ	10 (6%)	オ	68 (44%)
カ	10 (6%)	キ	15 (10%)	ク	14 (9%)	ケ	6 (4%)		

[ケ. その他の回答例]

- *しっかりとした授業 plan をたてるための時間 (都・普高)
- *対等に話せないまでも会話力の増強は不可欠であるし, なによりも JTE の英語全般についての勉強が必要である (都・普外高)
- *AET とのうちあわせの時間と会話力をつけるための時間 (郡・中)
- *共に教材研究が十分にできるゆとり (時間・場所) が保証されれば大部分は解決する (離・中)

(iv)その他の面で Team Teaching を現在よりよくするために必要と考えられることやあなたが実際に体験した Team Teaching の成功例をお書きください

()

[ivの回答の回答例]

〈必要と考えられること〉

- * JTE 自身も積極的に AET から会話を学ぶこと (都・普高)
- * クラスサイズを小さくする (都・普外高)
- * AET, JTE 両者が十分協議して指導案を作成すること, およびそのための時間 (離・普高②, 郡・中, 離・中②)
- * 授業後, かならずお互いに評価すること (郡・普高)
- * 職業系高校では内容を易しくし, 会話に重点を置いた授業に切り替える (都・普外高)
- * 派遣申請・報告書等の手続きを簡素化し AET 訪問を促進する (郡・普外高)
- * AET と意思の疎通を良くすること (都・中)
- * AET とゆっくと会話をする時間をとること。食事に行くとか, イベントにいっしょに行くなど (郡・中)

〈成功例〉

- * たとえば, 例文の提示など生徒にも授業の一翼を担わせる (都・普高)
- * 生徒たちに AET に質問する英文を前もって考えさせておく (都・普外高)
- * AET の体験談には生徒が興味を示すので, 毎時間, それを導入している (郡・普外高)
- * 英語 II C の添削指導により, 生徒の意欲が増した (離・普高)
- * 夏休み明けの授業で AET を迎えて, 皆自作の絵または写真を見せながら, それぞれの夏休みの思い出について話した (都・中)
- * 休憩時や昼食時に AET を生徒の中に入れ, お互い親近感を持たせたことによって, 外国人というイメージを取り去った (都・中)
- * 場面設定をしてその中で生きた英語を学ばせる (離・中)

(7)AET との Team Teaching で困る点は (複数回答可) :

- | | |
|------------------------------------|--------------------------------|
| ア. AET との意思疎通 | イ. AET との教育観のずれ |
| ウ. 教科書を進めない | エ. 生徒が Team Teaching に不満を持っている |
| オ. 学習効果に疑問 | カ. JTE の英会話力不足 |
| キ. AET との Team Teaching のやり方がわからない | |
| ク. 授業計画の打ち合わせ時間が十分でない | |
| ケ. その他, 具体的に (|) |

ア	42 (27%)	イ	28 (18%)	ウ	75 (49%)	エ	2 (1%)	オ	43 (28%)
カ	66 (43%)	キ	10 (6%)	ク	66 (43%)	ケ	17 (11%)		

[ケ. その他の回答例]

- * 進学校ではテキストの遅れなどを気にする先生がいる。受験英語と両立させられない (都・普高)
- * 生徒の学力が不足しているので TT の内容についてこれない (都・普外高②, 郡・普高, 郡・普外高)
- * 生徒の学習意欲の不足 (離・普外高)
- * AET も自分で授業するつもりでいてもらわないと困る (郡・普高)
- * AET が教職経験者ではないこと (離・中)
- * AET が必要なきが AET の訪問日になるとは限らないこと (都・中②)
- * 根本的に現在の制度では無意味 (都・普外高)

(8)AET との Team Teaching でよい点は (複数回答可) :

- ア. 生徒の英語力が向上した
- イ. 生徒が国際感覚を持つのに役立つ
- ウ. 生徒が異文化理解するのに役立つ
- エ. 生徒が英語を学ぶ楽しさを知った
- オ. JTE の英会話力の向上に役立つ
- カ. その他, 具体的に ()

ア	15 (10%)	イ	77 (50%)	ウ	88 (57%)	エ	90 (58%)	オ	69 (45%)
カ	11 (7%)								

[カ. その他の回答例]

- * 外国人に慣れてきた (都・普高)
- * 生徒が自分の英語力に自信を持つようになった (郡・中)
- * 生徒が積極的になった (離・中)
- * 英語を使って自然にコミュニケーションする力が上達した (郡・中)
- * JTE の英語教育に対する見方が変わりつつある。英語教育の未来に希望がもてるようになった (都・普外高)
- * AET の指導法が JTE の参考になる (郡・普外高)

- * JTE 自らが AET の活用を勉強すべきである (都・普高)
- * 日頃から JTE が AET と指導方針等を十分に話し合うようにすること, ないしはそのための時間が欲しい (都・普外高②, 郡・普高, 郡・普外高, 離・普高, 都・中, 郡・中②, 離・中)
- * 地域毎に複数の JTE と AET が seminar を持つことが必要 (都・普外高)
- * TT によく用いられる表現等を集めた冊子を作成する (離・普高)
- * TT 用の補助教材があればよい (郡・普外高)
- * 教科書を進めるのではなくて, 英会話中心の学習にする (郡・中, 離・中②)
- * 単なる遊びやゲーム中心の TT にせず, 語彙力や表現力及び聴解力の向上に役立てよう JTE だけの授業との関連を持たせる (郡・普高)
- * AET が主体となって授業をした方がよい (都・普外高②, 郡・普外高, 離・中)
- * AET は日本語や日本文化について勉強してほしい (都・中, 郡・中, 離・中)
- * AET には教職経験者を招致する (離・中②)
- * AET に簡単な教員免許を与え日本人教諭と同じ扱いにするべきである (都・普外高)
- * AET のシステムはやめて欲しい (郡・普高)
- * 入試を改革をしないと, どうしてもそのための授業になってしまう (郡・中②)
- * 年間計画の中での TT の位置付けをしっかりとる必要がある, そのためにも AET の交代は 9 月ではなくて 4 月にしてもらいたい (離・中)
- * TT だけでなく全教育活動で AET を活用すべきである (郡・中②)
- * JTE の海外研修・派遣等により JTE の実力養成が必要 (都・中)
- * クラスの人数を $\frac{1}{2}$ から $\frac{1}{3}$ にへらす (郡・普高)

8. あなたが実際に経験したことで, AET に関して困ったことなどがあれば, 具体的にお書きください

(i)授業 (Team Teaching など) について

[(i)の回答例]

- * 打ち合わせの時間が十分にとれない (都・普高, 郡・普高②, 離・普高, 都・中, 郡・中, 離・中)
- * 反応が鈍い生徒, 会話能力の低い生徒に対して AET がいらだち, 威圧的な態度で授業したことがあった (都・普高②)
- * AET は繰り返しを好まず, 一度言えば分ると思っている (都・普高, 離・中)
- * AET が積極性を欠き, 教材の準備も不十分で生徒に教えようという意欲が乏しい場合がある (都・普外高②, 郡・普高, 都・中②, 郡・中)

- * AET は教科書を使いたがらない (離・普外高)
- * AET が日本の教育事情について知識がない (郡・普外高)
- * AET は教職経験者の方がよい (都・普外高②, 離・普外高, 離・中②)
- * AET が授業の仕方を分っていない (離・中)
- * よく遅刻する AET がいる (都・中)
- * TT の時, AET は生徒の理解を助けようと安易に日本語を使いすぎる (都・普高, 郡・普高, 郡・普外高)
- * AET が既習以外の vocabulary を口にして困る (都・中)
- * AET に歌の指導もしてほしい (都・中)
- * One Shot Visit 等の不定期訪問や月 1 回程度の定期的訪問では系統だった plan が立てられず困る (都・普高, 離・普外高, 郡・中②)
- * TT を生徒が理解できていない (郡・普高, 郡・普外高, 離・中)
- * 単元の指導計画の中で AET を利用しにくい場合がある (都・中②, 郡・中)
- * JTE・AET それぞれが望む教材の進度が一致しない (郡・普高, 郡・中, 離・中)
- * JTE が文法説明の時, どうしても日本語で説明しなければならなくなり, AET に気を使う (都・中)
- * JTE の英会話力の不足により AET との意思の疎通が難しい (郡・中②, 離・中)

(ii)AET の校内での活動について (例えば人間関係など)

[(ii)の回答例]

- * AET の権利意識が強すぎる (都・普高)
- * AET は多くの生徒・先生に対して積極的だが, 日本人の側に躊躇や遠慮が多い (都・普外高)
- * AET に国際性を指導しようという意欲がない (都・普外高)
- * AET が全然日本語を理解できない時は, 英語科以外の教員は敬遠しがちなので, すべて JTE が世話をしなければならない (都・普外高, 郡・中)
- * AET が歩きながらガムやパンを食べたりすることがあった (郡・普高)
- * AET の中には人間関係で日本の教育環境に順応できない者もいる (都・普外高, 離・普高)
- * 進学体制のプレッシャーによる疎外感のために AET がとりのこされる (離・普外高)
- * AET が授業だけでなく職員のための研修や学校行事にもどんどん参加できるようにしてほしい (離・中)
- * AET にいる部屋がなく, 職員室にいると嫌がる日本人教師もいる (離・中)
- * 校内での AET の身分があやふやでゲストとして扱うべきか, 職員として扱うべきか

分らない（離・中）

(iii)その他

[iii)の回答例]

- * AET の訪問にとまなう手続き，例えば，派遣申請書・指導計画・報告書の提出等がわずらわしいので簡素化して欲しい（都・普外高，郡・普高②，都・中，離・中）
- * AET のなかには private student を持ったり，学習塾に顔を出したりするのに熱心な人がいると聞いている（都・普外高）
- * AET には若すぎる者もあり，教職経験のない者は除いた方がよい（都・普外）
- * AET もある程度は日本語を理解できることが望ましい（都・普高，都・中，郡・中）
- * AET との TT の重要性を言うのであれば，入試制度を改革するべきである（都・中）
- * AET が給食を食べる場合も校内の余りの給食でまかなっているため，給食費はもっていないが，このやり方だと学校によっては JTE にしわよせが来ている例があるのではないか（都・中）
- * 受験を前にした 3 年生には TT がやりづらい（離・中）
- * 文化の違いからか，AET が生徒にキャンディーやチョコレートをあげようとして困った（離・中）
- * AET の必要をあまり感じない（都・中）

III. アンケート結果分析

以下，質問項目ごとに結果分析を行う。

[1 について]

- (1) 学校区分を尋ねる設問。中学校と高校の割合はほぼ同じくらいになった。
- (2) 学校の規模を尋ねる設問。1 学年が 5 学級未満の学校が約 6 割を占めて最も多かった。
- (3) 学校の所在地を尋ねる設問。郡部が多少多く，離島部が多少少なくなってしまったが，3 地域にほぼ均等に割り振られた。

[2 について]

AET の訪問形態を尋ねる設問。AET の訪問がほぼ県下全域に行きわたっていることが窺えるが，オ「訪問なし」が 1% と非常に少ない反面，ア「常駐」イ「準常駐」両者を合わせても 10% に満たない数であった。ちなみに，オと回答したのは離島部の中学校で，地理的な条件のためと推測される。一番多かったのがウ「定期的訪問」で，エ「不定期的訪問」と合わせて 90% を越える数であった。

[2 ※について]

前問でウと答えた方のみを対象とした学校への AET 訪問の頻度を尋ねる設問。回答が割れたために分析しづらいが、ア「月 1 回程度」イ「月 2 回程度」の両者の合計がウ「週 1 回程度」エ「週 2 回以上」の両者の合計を上回った。オ「その他」としては学期に数回というものや教育事務所により期日が指定されるというものなど回答は様々で、各地区や各学校の状況によって訪問回数が異なっているようである。

[3 について]

学校への AET の訪問あるいは常駐の連続性を尋ねる設問。ア「特定の 1 人」に回答が集中した感がある。イ「特定の複数人」ウ「不特定」などは非常に少なく、ある学校に複数の AET が訪問することは、鹿児島県においては極めて珍しいケースと言えよう。

2, 2※, および 3 の結果から読み取れる鹿児島県内の公立学校における平均的な AET 訪問のあり方としては、特定の一人の AET が月に 1～2 回定期的に学校を訪問するというものである。

[4 について]

(1) 回答者個人の TT の経験および頻度を尋ねる設問。さすがにほとんどの方が、TT の経験ありと回答しているが、TT の経験がないと回答している方も 3% いることは見逃せない。

(2)(i) 前問で TT の経験ありと回答した方のみを対象を限定し、TT に対する意欲を尋ねる設問。TT に対してア「積極的である」と回答した方が 42% いる一方で、イ「あまり積極的ではない」ウ「どちらとも言えない」の両者の合計が、それを上回る数を示していることは気になることである。

(ii) 前問と同じ対象で過去 1 年間に TT を定期的に行ったかどうかを尋ねる問題。ア「定期的にしている」が半数を越え、イ「不定期的にしている」を上回った。

(3) 前問でア「定期的にしている」と回答した方のみを対象とし、回答者個人が TT に関わった頻度を尋ねる設問。学校への AET 訪問頻度を尋ねる設問 2※と同様に、エ「月 2 回程度」オ「月 1 回程度」が多く、合計 40% 近くを占めている。また、ウ「週 1 回」イ「週 2 回」あるいはア「週 3 回以上」と回答した方も合計 20% 程おり少ない。

(4) 4(1)で TT の経験がないと回答した方のみを対象とし、TT への意欲を尋ねる設問。しかし、TT の経験がある方が間違えて回答したものも多かったが、それもあえて対象から除外しなかった。ウ「どちらでもよい」が一番多かった。数としては少ないながらも、ア「是非とも希望する」と、エ「希望しない」が全く同数となった。

[5 について]

(1) TT を進める上での主導権の所在を尋ねる設問。イ「JTE が中心で AET が補助」が 40% で一番多く、以下ア「JTE・AET 対等」ウ「AET が中心で JTE が補助」がそれに続き大勢を占めた。オ「その他」の回答にもあったが、時と場合により JTE・AET

の主導権の比重が変わってくることも考えられる。

- (2)(i)TT に使用する補助教材の素材提供者を尋ねる設問。ア「主として JTE」が一番多く約半数にも達した。続いて多かったのがウ「JTE・AET 協議の上」で26%、意外に多かったのがエ「時と場合による」で14%の回答があった。
- (ii)TT に使用する補助教材の種類を尋ねる設問。カ「特に補助教材は使わない」が一番多くて42%。それを除くと、キ「その他」が他の選択肢より回答数で上回った。中でもカードや絵などの自作教材、あるいは写真・スライドなどといった既製のものの以外と回答したものが目立った。ウ「外国で発行されているテキスト」やエ「TV・ビデオなどの視覚教材」と回答したのもそれぞれ10%を越えた。
- (3)TT の指導案の作成者を尋ねる設問。ア「JTE が全て作成」が60%で圧倒的に多い他、ウ「JTE・AET 両者が協議して作成」が24%でかなり多くの回答を集め、エ「時と場合による」も12%と意外に多かった。一方、イ「AET が全て作成」は1%と非常に少なかった。オ「その他」では指導案は作らないとする回答もいくつか見受けられた。
- (4)AET の TT 中での活動を尋ねる設問。ア「発音・イントネーションの指導」イ「英問英答」ウ「モデル・リーディング」カ「ゲーム」コ「自己紹介」の順に多く、いずれも70%を越えている。それらに続くのが、エ「ロール・プレイによる英会話指導」オ「自由英会話指導」ス「お話」ノ「ヒアリングテスト」などで、音声面での指導が上位を占めた。その反面、JTE が平常の授業で行っている、ネ「英文法の指導」やト、ナ、ニの選択肢のようなペーパーテストに関わる活動、ハ「受験勉強対策」テ「生徒のしつけ」などには予想通り AET の関わりが薄いことが分った。また、キ「授業の導入」に AET が関わることは少なくないが、ソ「授業のまとめ」に AET が関わることは極めて少ないようである。
- (5)TT 時の生徒の反応を尋ねる設問。ア「ほとんど全部の生徒が授業内容を理解し、積極的に授業に参加しているようだ」が22%と少なくないが、イ「授業内容を理解し、積極的に授業に参加している生徒とそうでない生徒が、ほぼ半々の割合でいるようだ」の41%とウ「ほとんど全部の生徒が授業内容を理解できず、あまり積極的に授業に参加していないようだ」の10%を合わせた全体の約半数にあたる方が、TT における生徒の授業内容の十分な理解と積極的な態度に多少疑問を抱いているようだ。また、エ「時と場合による」と回答したのも20%と少なくなく無視できない。オ「その他」には授業内容の理解はさておき、TT を生徒が楽しんでいるという意見もあった。
- (6)(i)TT をよりよくするため、生徒たちにとって必要なものを尋ねる設問。ア「英語を聞く力」が72%で一番多く、続いてイ「英語を話す力」とウ「英会話に対する積極性」が並んで65%、次にカ「英語に対する興味」が53%と、生徒の英語力特に英会話力を必要とするものが上位を占めた。その他の選択肢も20%～30%台の回答を集

めたが、いずれも前に列挙したものと比べると低い割合を示している。

- (ii) TT をよりよくするため、AET にとって必要なものを尋ねる設問。ア「教育に対する意欲・情熱」が68%と一番多く、唯一半数を越えた。続いてカ「外国語としての英語を教える技術」ウ「日本文化および日本の教育に対する理解」オ「生徒に対する愛情」ク「自分の任務に対する責任感」が30%~40%台の回答を集めた。中でもカの選択肢のように AET に外国語としての英語教授法の習得が必要と考えている方が予想以上に多かった。
- (iii) TT をよりよくするため、JTE にとって必要なものを尋ねる設問。ア「AET と対等に話せる英会話力」が79%と圧倒的に多く、多くの JTE が現在の自分の英会話力を不十分と考えていることが窺える。続いてイ「やる気・熱意」オ「TT の理論・技術についての研修」ウ「TT に関するマニュアル」の順で30%~50%台の多くの回答があった。JTE はやる気や熱意も必要と考えている反面、自らの TT についてのやり方にあまり自信が持てていないことが推測できる。他の選択肢はいずれも10%以下で回答した方は多くなかった。また、ケ「その他」の中には、TT の計画や AET との打ち合わせ、あるいはそのための教材研究に利用できるゆりの時間が必要という切実な声もあった。
- (iv) TT をよりよくするために必要と考えられることおよび TT の成功例を尋ねる設問。まず、TT をよりよくするために必要と考えられることとして「AET・JTE 両者が十分に協議して指導案を作成すること、およびそのための時間」を挙げる回答が多かった。AET・JTE 両者の十分な協議は言うまでもなく充実した TT のためには必要不可欠であろうが、そのための時間がなかなか思うようにとれないというのが実情のようだ。このような回答は離島部の学校から多く、地理的な条件も大きく影響しているものと思われる。他にも「AET とゆっくりと会話をする時間をとること。食事に行くとか、イベントにいっしょに行くなど」といった、TT 時、あるいはその前後はもちろんのこと、AET とのふだんからの意思の疎通を重視する回答がいくつかあり、前述の回答を含めて JTE と AET のよりよい人間関係を基盤とした両者の意思の疎通の大切さを痛感している方が少なくないことが分った。他に JTE の英会話力向上のための努力、クラスのダウンサイジング（規模縮小）、AET の訪問に関する手続きの簡素化などを求める回答があった。

次に成功例についてであるが、TT 時に生徒を積極的に授業に参加させるための工夫を述べた回答が多かった。たとえば、例文の提示、AET への英語による質問、夏休みの思い出を自作の絵または写真を見せながら英語で話すことなどを、生徒に前もって準備させておいた上で TT 時にやらせることで TT がうまくいったというものがあつた。その他には、生徒と AET との人間的なつながりを深めるため、休憩時や昼食時など TT 以外の場面で AET に生徒の中に積極的に入ってもらった

という回答や、毎時間の授業の導入部で、生徒の興味をひくために AET に体験談を語ってもらうという回答があった。

(7)TT において困る点を尋ねる設問。ウ「教科書を進めない」が49%と一番多く、約半数近くの回答を集めた。TT において教科書を用い、ふだんの授業と同じ程度の進度を保つことに困難を感じている方が多いことが分った。同じ40%台でカ「JTE の英会話力不足」とク「授業計画の打ち合わせ時間が十分でない」が並び、JTE が自分の英会話力に対し自信を持つことができず、AET と授業計画の打ち合わせが十分にできずに困っていることが分った。それらに続くのがオ「学習効果に疑問」28%、ア「AET との意思の疎通」27%で、前者をウとの関係で考えれば、TT では教科書を進めず、ゲームや自己紹介で授業が終始してしまうことも多いため、学習効果に疑問を持つ方が多かったと考えられるし、また後者をカとの関係で考えれば、英語を通じての AET との意思の疎通を困難と感じる方が多かったと考えられる。イ「AET との教育観のずれ」と回答した方も18%と少なくなく、見逃すことができない。ケ「その他」では生徒の学力不足や学習意欲不足を挙げる声も多く聞かれた。他にも、TT と受験英語の両立を危ぶむ意見や AET に教職経験者を望む意見などがあった。

(8)TT のよい点を尋ねる設問。エ「生徒が英語を学ぶ楽しさを知った」ウ「生徒が異文化理解するのに役立つ」イ「生徒が国際感覚を持つのに役立つ」の三者がそれぞれ半数を越える回答を集めた。その反面、ア「生徒の英語力が向上した」とする回答は意外に少なく、わずか10%に留まった。オ「JTE の英会話力の向上に役立つ」も45%と多かった。これらの意見を総合すると、TT は生徒に英語を学ぶ楽しさを与え、彼らが異文化を理解し、国際感覚を持つのに役立っているが、英語力の向上にはあまり役立っていないということになる。けれども、TT が JTE の英会話力の向上に一役買っていることも忘れてはならない。カ「その他」の回答例にもあるように TT が少なからず JTE の英語教育に対する見方を変えつつあることは間違いないようだ。

[6 について]

AET の授業以外の活動を尋ねる設問。ス「JTE と free conversation」が62%で一番多かった。続くシ「生徒と free conversation」エ「休み時間等に生徒の質問に答える」までが半数を越える回答を集めた。スの結果で分るように、JTE が AET の話相手になり、互いにコミュニケーションをとるという意味ではもちろんのこと、そのことにより JTE の英会話力の向上に役立っているようだ。シやエという回答が多いのもよいことで、TT 時以外に生徒が AET から得るものは英語力の向上だけでなく、それがひいては異文化理解や国際感覚の習得へのステップとなる可能性を秘めている。他にはセ「JTE 以外の教職員と free conversation」41%、ク「必修クラブ指導」28%、カ「学校行事」21%が多く、AET と JTE 以外の教職員とのふれあいがあること、AET にとって必修クラブや学校行事が TT 以外に教育活動に参加できる貴重な場面となっていることが分った。

チ「スピーチ・コンテスト」オ「インフォーマントとして」イ「JTEの英会話指導」ソ「教材用テープ吹き込み」は、それほど数は多くないが10%台の割合を示した。学校によってはAETがJTEの音声面での指導や自己鍛練を助けていることが窺える。逆に回答が少なかったのが、会議やホームルーム指導など学校・学級経営に関するものであった。
[7について]

AETを教育現場でよりよいかたちで生かすための意見を尋ねる設問。校種あるいは地域を問わず最も多かった意見はJTEとAETが指導計画等、十分に話し合うことが大切でそのためには時間が欲しいというものである。このような意見が多い背景には種々の校務に追われ、JTEがAETと話し合う時間をとることさえ困難な極めて多忙な学校現場の実情があるようだ。次に多いのはAETの増員による1枚1名常駐体制を求めるものであった。そこまでではなくてもOne Shot Visit・不定期的訪問では不十分と考え、訪問の回数をもっと増やし定期的訪問にすべきというものも多かった。AETが不定期的に訪問して来るよりは、定期的訪問あるいは常駐の方が対応しやすいし、その意義も大きいと考えている方が予想以上に多かった。

また、AETが主体となって授業をした方がよいという回答も多く、それと関連してTTにおいて教科書を進めるのではなくて英会話中心の授業にした方がよいと考えている方も少なくなかった。そのような意見の延長線上に、AETには教職経験者を招致した方がよいという意見やAETに簡単な教員免許を与えるべきだという意見があるように思われる。その他、複数の回答が得られたものを中心に上げると、AETに日本語や日本文化の習得あるいは理解を求めるもの、AETを生かす授業をするためには入試改革が不可欠とするもの、AETをTTだけに限らず全教育活動で活用すべきというものなどがあつた。単独回答ながらも、海外研修・派遣によるJTEの実力養成の方がまず大切というもの、年間計画の中でのTTの位置付けをはっきりさせるためにAETの交代時期を4月にしてもらいたいというものなど、興味深い意見が数多く寄せられた。

[8について]

(i)AETに関して授業の面で困った経験を尋ねる設問。打ち合わせの時間の不足を述べた回答が校種・地域を問わず最も多かった。次にAETの積極性の欠如や教材研究不足でやる気がないというもの、One Shot Visit等の不定期訪問や頻度が少ない定期的訪問では計画が立てにくいというものなどが目立って多かった。

その他、複数回答が得られたものを中心に上げると、AETがTT時に安易に日本語を使いすぎるといふもの、AETは繰り返しを好まないといふもの、AETが反応の鈍い生徒や会話能力の低い生徒に威圧的な態度をとったといふものなど、AETの特性から生じると考えられる問題や、単元によってAETが利用しにくいことがあるといふもの、JTEの英会話力の不足によりAETとの意思の疎通が難しいといふもの、TTを生徒が理解できていないといふもの、TTの時JTEとAETのそれぞれが

望む教材の進度が違うというものなど、TTにおいてJTEが直面した問題が多く寄せられた。また、困った経験ということに当てはまらないが、この設問でもAETに教職経験者を望む声が多く聞かれた。

(ii)AETの校外の活動について困った経験を尋ねる設問。AETが日本語を理解できない場合にJTEが面倒をみなければならないというもの、AETの中には人間関係で日本の教育環境に順応できないものがあるというものには複数の回答が寄せられた。AETが日本語を理解できない場合、JTEが世話係とならざるを得ないが、それを負担と感じている方もいるということが分った。その背景にはAETに対して不慣れなために扱い方に戸惑い、躊躇や遠慮があったり、ひどい例ではAETの存在を煙たがる日本人教師さえいるという困難な状況があることが、他のいくつかの回答から推測される。この状況にさらに受験体制のプレッシャーが加われば、状況が一層困難になることは想像に難くない。また、AETの権利意識が強すぎるとか、AETがガムやパンを歩きながら食べるといった、文化や精神構造の相違から生じた行動に対して不満の意を表する回答も見られた。

(iii)AETについてその他の困った経験を尋ねる設問。AETの訪問にともなう手続きをわずらわしいと感じ、その簡素化を望んでいる声はずいぶん多い。ただでさえ多忙なJTEがTTによってさらに多忙化しているようで、このような手続きはできる限り簡素化してゆきJTEのTTに関する重圧感を払拭して、やる気を起こさせることが大切だろう。また、AETに日本語の理解や教職経験を求める意見も複数の方々から寄せられた。他にはAETと受験体制との両立の困難さを主張する回答やその打開のために入試改革を求める回答があった。AETが生徒にお菓子をあげようとしたというような、文化の違いから生じるトラブルも一部の回答の中で報告されているが、このような場合JTEが中心になってAETに対して日本の文化・風習などを十分に説明し納得させれば解決できる問題のような気がする。少し気になったのはAETの中に家庭教師や学習塾でのアルバイトに熱心なものがあるという指摘やAETの給食(費)はどうすべきなのかという指摘で、それらについては事実関係の確認とともに適正な措置が講じられるべきであろう。

IV. アンケート結果総括——AETのよりよい活用に向けて——

まず、試みにアンケート結果から浮かび上がってきた、鹿児島県の平均的な公立中学校・高等学校の平均的なJTEがAETと関わっている平均的な日常の姿を以下に描写してみることにする。

彼はAET系のJTEで過去にTTの経験を持ち、どちらかというとならTTに積極的である。彼の学校には月1～2回、ある特定の一人のAETが定期的に訪問してくる。そのと

きに彼も TT を行うようにしている。TT 時には主に彼が主導権を握り、AET は補佐的な役割をつとめるが、時と場合によっては AET が主導権を握ることもある。ふだん TT の時、補助教材は特に使わず、教科書を用いることも多いが、自分で作成したカードや絵など自作教材を使うこともある。TT の指導案は主に彼が作り、それについて AET と話し合うこともある。TT の時、AET は発音・イントネーションの指導、英問英答、モデル・リーディングなど音声面での教育活動を担当し、One Shot Visit の場合はゲームや自己紹介をすることもある。TT 時の生徒の反応は授業内容を理解し、積極的に授業に参加している生徒とそうではない生徒がほぼ半数の割合でいて、それは時と場合によって変わってくる。TT をよりよくするため、彼は生徒たちにとっては英語を聞く力や話す力やそのような活動に対する興味が、AET にとっては教育に対する意欲・情熱が、また、JTE にとっては AET と対等に話せる英会話力がそれぞれ必要と考え、何よりも AET・JTE 両者が十分協議して指導案を作ることとそのための時間が重要だと痛感している。彼には TT に生徒を積極的に参加させる工夫をして成功した経験がある。TT において彼が困っていることはそのとき教科書を進めないということで、自分の英会話力に若干の不安を持ち、AET との打ち合わせ時間が足りないと感じている。彼は TT のよい点として生徒が英語を学ぶ楽しさを知り、異文化理解や国際感覚習得に役立っていることを認めながらも生徒の英語力向上にはそれほど顕著に役立っていると感じていないが、自分の英会話力向上には役立っていると思っている。彼の学校の場合、AET が TT など授業以外にすることは JTE や生徒と英語で会話したり、休み時間等に生徒の質問に答えたりすることが多く、ときどき JTE 以外の教諭と話をしたり、必修クラブや学校行事に参加したりしている。彼は AET を学校現場でよりよいかたちで生かすためには指導計画等 AET と話し合う時間が必要という意見を持っているのだが、ふだんは種々の校務に追われてなかなかそのような時間が取りにくいのが現状だ。どうやら、AET が彼の学校に常駐していないため、月に数回訪問してきたときしか AET と会う機会がないこともその一因となっているようだ。彼は、彼の勤務校に AET が常駐してくれること、あるいはもっと頻繁に AET が訪問してくれることを望んでいる。今まで彼は TT 時の AET のやり方や態度に多少の不満を持ったこともあった。また着任してから間もない時期など AET が日本語を理解できない場合、他の教科の日本人教諭がどうしても避けがちなので、彼のような AET 系の JTE をはじめとして JTE が中心となって AET の世話をせざるを得ない。多忙な毎日を送る彼は、ときどき AET が訪問してくるときの手続きをわずらわしいと感じ、そのような手続きが簡素化されればどんなによいだろうと思うことがある。そして、生徒たちに上級学校の入試のための受験指導もしなければならぬ立場にある彼は、受験のための英語授業と TT などコミュニケーション能力育成のための英語授業の狭間でジレンマに悩むことも少なくない。

以上のものは、あくまでもこのアンケート調査結果だけから筆者が想像したもので、若

干、現実のそれとは違う点があるかもしれないことをお断りしておきたい。だが、本県の公立中学校・高等学校における AET の実態とそれを受け入れる JTE の大まかな状況が、これによって容易にイメージ化できるであろう。

ここで今まで行ってきたアンケート結果の分析をもとに、本県の公立中学校・高等学校の AET が学校現場において、よりよいかたちで機能するための提言をしたい。

1. 現場の JTE の意見を聞きながら AET を増員し、理想的には 1 校 1 名の常駐、それが不可能であれば少なくとも、各校に週 1 回は定期的訪問ができるようにする。——AET の数を増やすことにより、常駐校・定期的訪問校が増え、TT を授業計画の中で総合的に活用できるようになると同時に JTE にとって多くの TT の経験が得られやすくなり、その結果 TT の技術的向上が望める。
2. JTE は AET と指導案や授業計画を協議することはもちろん、英会話力向上のため、あるいはよりよい人間関係の構築のためお互い十分に話をするようにつとめる。できる限り、そのための時間や機会が容易に得られるようなゆとりのある教育環境を整備する。——まず、JTE は AET と時間をかけてつきあい、よきパートナーとして AET との信頼関係を作ることが大事であるが、現在の学校現場はそうするには少々多忙すぎるかもしれない。そのようなことが容易にできる教育環境の整備が待ち望まれる。
3. JTE と AET は協力して生徒が TT において最大限に英語力を向上させることができるように、TT の理論・技術に習熟し、TT 前の指導案作成や教材研究、TT 後の相互評価を積極的に行うことによって、よりよい TT の実施を心がける。——そのためには TT の研究会・研修会の実施、AET・JTE 双方に TT の効率的方法を指導する TT 専門の指導者の育成とそれを前提とした指導体制の確立、どのような状況下のどのような JTE にも役立つような TT のためのマニュアル作りなどを含めて、現場の声を十分に反映させた TT の理論・技術の研究が今後もっと活発に行われることが重要であろう。
4. TT と受験のための英語授業は両立しないと考えるのではなく、ふだんの授業にも音声面での指導を積極的に取り入れるなどして、TT とふだんの授業の両立だけに留まらず、もう一步進んで両者の効果的な連繋もしくは融合を図る。——TT が受験対策の授業と全く無関係と考えるのは妥当ではない。TT も受験に役立つし、ふだんの授業でも音声面の指導ができるはずだということを忘れてはならない。この両者の間に壁を作ってしまうことは、これからの TT の発展の障害になりかねない。また、JTE がこれまでの英語教育のあり方に疑問をもち、そのことについて真剣に考え直さざるを得なくなったのは、いわば AET の功績である。その意味で、AET が日本の英語教育に与えた影響は極めて大きいと言えるだろう。
5. JTE だけでなく、他の教職員も協力し合って、学校現場に AET が容易に溶け込めるような雰囲気を作る。——JTE が AET の「お荷物」的存在でいることは望ましくない。そうならないように他の教職員が国際的な視野に立ち AET をパートナーとして受け入

れることが重要である。学校現場がこのような国際的な環境であってこそはじめて、そこで世間でよく言われている国際人の育成が可能なのである。

以上の提言はもとより未熟な筆者が決して万全とまでは言えない研究とそれから得た浅薄な知識に基づいて行った提言であるため、少々独断的で近視眼的であるとか、現場の意見や実態から多少ずれているというような批判を免れないかもしれないことは承知している。

毎年、数多くの AET が鹿児島県の地を踏み、日々、県内の公立中学校・高等学校の教壇に立って生徒たちの指導にあたっている。そして近年、その数はますます増える傾向にある。そのような状況にあるからこそ、ここ鹿児島県においても AET についての研究が今後ますます活発になされ、多くの人々が AET の望ましいあり方について考え、そして議論し合うことが、本県の英語教育の中で AET が着実に定着し大いに活用されるためには必要不可欠なのである。そして、それが必ずや本県の英語教育の発展へとつながってゆくはずであると確信している。そのような立場に立って、筆者は AET の実態についてのアンケート調査を行い、その結果および分析をこのように論文として発表した次第である。

今後の研究のためにも、この論文を読まれた方々からの厳しいご叱正とご教示が得られれば幸いである。

(1993年1月18日受理)